哲学とアートのための12の対話――『現代』を問う

第6回：人類が暴走し始めている？

2023年9月16日（土）14:00 京都芸術センター大広間

【「暴走」とは？】

人類が「暴走」し始めている？

....そもそも「暴走」とは、どういう事態なのだろうか？

「暴走」とは、あるメカニズムが規則や秩序を無視して勝手に走り出し、制御が効かなくなる状態のことである。システムの暴走はしばしば「プラスのフィードバック」によって発生する。プラスのフィードバックとは、システムの特定の作動が生み出す「出力」が、その作動をさらに加速・増幅させる信号として再び「入力」されることである。

例えば「暴走族」は、その暴走行為によって周囲の人々から苦情が出たり警察が取り締まろうとすると、さらに暴走する。暴走の動機が社会の秩序や規制に対する反抗心なのだから、暴走を抑止しようとする試みがさらなる暴走の引き金を引く。こういうのがプラスのフィードバックである。あるいは子供が泣き出す時、自分の泣き声を聞くことでよけい悲しくなってしまい、さらに激しく泣きはじめる。（そしてついには自分がなんで泣いているのか分からなくなったりする。）

【 自然的な制御 】

とはいえ、いくらヤンチャな暴走族でも三日三晩走り続けることはできないし、むずかる子供も明日の朝まで泣き続けることはできない。オートバイの速度には上限があり、給油もしなければならないし、もちろん人間自身、やがて疲れてしまう。そうした物理的・生物的な限界によって、自然に制御がかけられることになる。バッタの大発生も一種の「暴走」だが、やがて食べるものがなくなれば終息し、地上がすべてバッタで埋め尽くされることにはならない。

けれども、そうした自然な制御がうまく働かない場合もある。それは文明が可能にする抽象的、記号的な活動に関わる領域である。つまり人間の世界だ。どんなにグルメな人でも一日に十回の美食をすることはできないし、超人的なプレーボーイでも百人の恋人と付き合うことはできない。けれども、それだけの贅沢を可能にするだけの資産を獲得することはできる。資産は増えれば増えるほどそれを管理するコストもかかり、資産の増加はさらなる増加の動因となる。つまりプラスのフィードバックであるが、ここには自然的な歯止めがない。

そして、車の暴走が事故と表裏一体であるように、お金やパワーの「暴走」は「カタストロフ」と表裏一体である。際限のない資産蓄積は破産や巨額の負債と隣り合わせであり、資本主義の暴走は恐慌をもたらす。安全保証のための軍備拡張は、同時に世界終末への歩みをも意味する。20世紀の初め、フロイトは「エロス（憧れ、欲望）」と「タナトス（死の衝動）」というカップルについて、そして厄介なことに人間はその両方に魅了されてしまうことについて語った。

【 文明は暴走しやすい 】

「暴走」は、自然的生物としての人間の中からは出てこない。それは欲望をフィードバックし増幅する装置としての文明によって可能になる。そこにはカタストロフの危険があるが、同時にそれが文明という装置の強さでもある。文明とはそもそも何か？ 地球や生物の進化から見ると、それはごく最近起こった変化の結果である。ひとつは農耕牧畜段階への移行（約1万年前）、もうひとつは産業革命（250年前）である。その後も核エネルギーの利用とかデジタル革命とかいろいろあるように見えるが、それらは近くにあるから目立っているだけで、私たちはいまだに産業革命の続きを生きており、さらに長い目で見るなら、新石器時代の続きを生きているとも言える。

【 複雑さ 】

文明の「暴走」的側面それ自体は悪ではなく、それは文明のエネルギーの発露なのであるが、それをカタストロフにならないように制御するにはどうすればいいか？ 私たちはともすると、それを「外から」コントロールしようとする。つまり規則（校則から憲法まで）を作ったり、暴走とは反対方向の力（警察、法的強制力、etc.）によって押さえ込もうとする。それらも場合によっては必要だが、よりエレガントな制御は、「仕掛け」としての文明そのものの内部に、暴走が適度に抑制されるような自動制御の仕組みを作ることである。

そのために、私はシステムにおける「複雑さ」がキーワードになると考えている。「複雑さ（complexity）」とは、全員がみんな同じ方向を向いていないこと、と言い換えることもできる。それは一見、システムとして効率が悪いように見えるかもしれないが、実はそうではない。とりわけ2000年代以降、「複雑さ」の重要性はネットワーク、生態系、社会構造、経済活動などレベルの異なったシステムに共通するものとして注目されてきた。哲学とアートという文脈においてはどのように考えられるだろうか？

【 カオス 】

「カオスが身体とダイナミズムの感覚に訴える強い力をもっているということは、それが専門家や哲学者だけではなく、一般の読者をも魅了していることをみれば明らかである。例えば1987年に出版されたジェイムズ・グリックの『カオス』という本は、アメリカにおいてはホーキングの宇宙論に次ぐベストセラー科学書のチャンピオンとなったようだ。」

「カオス理論は、それまで「混乱」や「誤差」と思われてきたものにも、重要な意味があることを発見したのだ。そして驚くべきことに、そうした混乱が実は、ムチャクチャな確率論的擾乱によってではなく、実に単純な数学的モデルから「決定論的」に生み出されることを証明したのである。このことは逆に言えば、一見無秩序な混乱と見えるもののなかにも、秩序や形態を生み出す萌芽が隠されているということであり、一定の条件を与えられると、「混沌」のなかから何の外的な強制力もなしに、「秩序」が形成される可能性を示唆するものである。」

（室井尚・吉岡洋『情報と生命』「挑発するカオス」新曜社、1993年）